



TITLE:

[21-4]タイの農村生活と宗教：東北 タイの一稲作村を中心に

AUTHOR(S):

林, 行夫

CITATION:

林, 行夫. [21-4]タイの農村生活と宗教：東北タイの一稲作村を中心に.
DDニューズレター 1984, 21: 15-20

ISSUE DATE:

1984-12-21

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/236257>

RIGHT:

「公益社団法人国際農林業協働協会」の許可を得て登録しています.

[21-4]

アジア諸国の民俗と宗教

「国際農林業協会の誌」 7巻2号。
1984年より。

タイの農村生活と宗教

——東北タイの一稲作村を中心に——

林 行 夫

(龍谷大学大学院博士課程社会学専攻)

1 上座部仏教国タイ

日本の1.35倍の国土(約51.9万km²)をもつタイ国は、およそ4,788万の人口(1981年)を擁している。そして全体で8割近い人々が農業に従事しているといわれ、各地方に展開する農村部はタイ人の生活世界を様々な面で大きく規定している。タイ社会に固有な文化の特徴や価値観を探ろうとする者にとって、農村部での人々の生活の実態や社会行動を知ることが重要である。とりわけ、その日常生活の中で実践される宗教の意味を把握することは無視できない領域をなしている。

ひとくちに農村部といっても、タイ国は地形、歴史、文化、産業などの点で大きな地域差がみられその社会生活は一様ではない。さしずめ4つに区分すれば、チャオプラヤーデルタを中心とする中部、チェンマイ盆地を中心とする北部、コラート高原上の東北部、マレー半島部の南部という文化圏を想定できようが、宗教圏という指標では、前三者と南部地方の二つに大別されうる。タイ社会では全人口の95%以上が上座部仏教徒である。国教としての仏教は、イスラム教が支配的な南部地方や一部の少数民族を除いて中・北・東北部農村の人々の支配的な生活規範となっている。

仏教国タイを象徴するものは色あざやかな寺院と黄衣をまとった僧侶である。首都圏や地方諸都市にはもちろん、上記の地方のほとんどの農村には寺院がみられる。寺院の総数はタイ国全土で3万459寺(1981年)を数え、年々ふえ続けることはあっても減ることはない。寺院には満20歳以上の男子が227戒を遵守する僧侶として、満20歳未満の男子が10戒を遵守する見習僧としておのおの出家し止住している。1981年の統計では僧侶は35万258人、見習僧は14万3,115人となっている。

タイの寺院では得度と還俗が比較的自由に行える。出家者には長期間出家生活を行う者と比較的短い期間で慣習的に得度する者がある。出家は必ずしも一生涯のものとは限らない。後者の出家行動はとくに一種の人生儀礼として、結婚前に得度して社会的に「一人前」(Khon suk)と認められる成人式のような意味があることを示している。その場合、農村部では入安居から出安居までの三ヶ月で還俗するケースが多い。村落レベルの仏教は、奥義をきわめる対象というよりは、実践されるものとして人々の生活のすみずみにまで行き届いている。それは、人生の執着を断ち〈苦〉からの解脱を求めて持戒するエリートのための上座部仏教とは異なる民衆仏教として根づいている。

さらに、人々によって展開される民衆仏教は、概念上は区別できるいくつかの非仏教的要素を含んでいる。それはヒンドゥー起源の神であったりその地方特有の守護霊であったりする。にもかかわらずそれらの要素は人々の意識や生活の中で区別されることなくひとつの宗教として統合されている。タイ社会に広く流布する「精霊」(phi)や「魂」(Khwān)などの観念によって秩序づけられている人々の生活世界は、彼らが理解する仏教をリアルなものにし、生活の諸レベルの幸福と吉兆に結びつけているのである。以下では筆者が1983年に収集した資料を中心に、農村生活のなかで人々がどのような形で自らの仏教を実践しているのかという概略を紹介したい。調査村は首都バンコクより東北へ約450km離れたコンケン県ムアン郡ドンハン行政区にある一稲作農村、ドレデー(以下 DD)村である。

2 寺院と農村生活

一般に農村部の寺院は、開村とともに設立される。後になって村が枝分れしたりすることによっていくつかの村が一つの寺院を共有することも多い。近隣県マハーサラカム県やローイエット県からの開拓者によって約120年前に開村された DD 村は、約70年前から枝村ドンノイと同一の寺院を共同管理している。

東北部のみならず、農村の人々は「寺院は皆の家だ」という。寺院は、僧侶が止住する聖域であると同時に村落社会内の様々な世俗的機能を果たす「公共の場」としての性格をもっている。寺院は年中行事化した祝祭色の濃い仏教儀礼の会場であることはもちろん、DD 村では映画や催し物の主たる娯楽会場であり、選挙時の投票場や宿泊所ともなる。また、村人が寄進した食器・日用品が常備される台所兼食堂でもある。他村の人々も利用できる寺院は、村人自らの布施・寄進によって支え

られている。講堂や布薩堂などの建造物は人々の生活費のなかから寄金されたり、労働奉仕されることによって徐々に整えられてきたものである。この意味では、寺院の豪華さはその村の経済力の一指標でもある。

止住する僧侶にとって、寺院は俗界とは異なる清浄な持戒の場である。その聖域としての性格を維持することは、俗人である村人にとってブン(bun;「功德」の意)を生む場であることを保証する。タイでは寺院・僧侶への布施行為、自らの出家、在家戒(5戒・8戒)の遵守など、三宝(仏陀・佛法・僧侶)の維持に貢献する行為はすべてブンを得ることにつながるとされ、これをつむことはタン・ブン(tham bun)といわれる。この考えは日常的思考として人々の意識に強く内面化されており、民衆仏教の主要素をなしている。さらにタン・ブンは拡大解釈されて自らを他者に尽す社会的善行の代名詞ともなっている。

ブンの思想は「因果応報」、「輪廻転生」の概念に根ざすものである。村人は、現在(この世)の境遇(地位・運)は前世でつんだブンの多寡によって決まるという。前世で善行を多くなし、ブンを多く得た者は「この世」での幸福を享受することができる。善行によるブンの多寡はつねに「悪行」(bap)との差し引きで計られるので、人々は機会をみては自らブンの蓄積に努めなくてはならない。それはすべて当人のより良き後生に関わるものだからである。民衆仏教の最終・最大の目的はより豊かな来るべき人生にあるのであって〈解脱〉を求めることではない。DD 村でも、出家は重要なタン・ブンの手段とされる。出家できない女性は日常の布施行や四斎日(wan phra)でのお籠り(持戒行)に熱心である。早朝、村内を托鉢に回る僧侶に食事を用意したり、正午前の食事を雨の日も寺院に運ぶのも女性にとって大切なタン・ブンの機

会なのである。村内の子供達は大人たちからこうした考えをきくほか、初等教育の四年生位ですでに教師によって教えられる。彼らはブン少なくして地獄(narok)へ行くことを最も恐れる。

寺院を維持・管理するのは決して個人的方法に終始するわけではない。寺院を中心にする年中行事は約12種類であるが、1983年には計15回の儀礼が行われている。それは全村あげての公共的なタン・ブン儀礼であり、未完成の布薩堂の工事費を募るものである。農繁期を除く1～4月、9～11月に儀礼は集中し、この間の寺院はにぎやかな儀礼のラッシュの場である。肉料理や果物をそろえたごちそうが献上され僧侶の読経が聞かれる。儀礼によっては個人とは別に金世帯主から寄金が募られる。寺院にはこのような儀礼の際に寄金を集め管理する委員会が村人によって作られており、寺院の財政を一括して担当する。それは寺院の環境整備を組織的に行うためである。寺院内の拡声器を通して人々の儀礼・寄金への参加をよびかけ、寄金額を個人の名前とともに読みあげるのも彼らの役割である。

寺院に食事を届けるのは布施する者の自由である。同時に必ず一定量の食事が用意されるようにDD村では7年来、食事の輪番制が女性を中心に行われている。さらに、雨が降らない乾季(11月～3月頃)には村内の青年会(klum num sao)が水運びを行って寺院内にあるタンクに給水する。DD村の各戸では、雨季(4月～10月頃)の間は雨水を水がめのために飲用とするが、乾季には近隣村に飲料水を求めて手押し車で取りに行く。この時期は僧侶が特に困る時だからである。タンクの水が少なくなると寺院内にある太鼓が見習僧達によって鳴らされ、補給願いを告げる。

これらの行為はすべてブンにつながる。まさにタン・ブンの文脈で村人と寺院との関りは強く結ばれている。ある古老が「ブンは我々

の幸福である」というとき、寺院は様々な機能を果す建造物である以上に村人にとって精神的な拠り所であることを意味している。村人自身によって運営される寺院は、文字通り村人と共にある「聖域」である。村内の有力な古老である数人の篤信者達は寄金の具体的な使用用途や儀礼の準備の助言者、リーダー的役割を果たしている。

3 僧侶と俗人の宗教的リーダー

一般に、農村部の寺院に止住する僧侶の地位は高く、村内の精神的指導者としての役割を果たしているといわれる。僧侶はブンを生む源泉としての象徴的役割を果たすとともに、俗界と聖域の間に橋をかける存在でなければならない。DD村でも多くの村人が望ましい良き僧侶とは、僧侶として正しく持戒しながら仏の教えを人々に広める努力を惜しまぬ存在と答える。他者をかえりみることのない修行僧タイプの僧侶は余り好ましくない。その土地の言葉を使い、人々とともに悩み現実生活に貢献する指示や知識を社会的に展開する存在として良き僧侶はイメージされている。タイの農村部にはこのような僧侶が実際に多く存在する。薬を作って病人に与えたり、悪霊除けの護符を授けて尊敬を得る者もある。

DD村では調査期間中の1983年6月に村内出身の長期出家僧が他県より27年ぶりに戻ってきたが、それまでは僧歴2年の若き僧侶(23歳)1名のほか見習僧が15名いたばかりであった。村の人々は上記のような僧侶一般に対する期待とは異なった目で彼らを捉えている。彼らは俗人教育をうけるために寺院に止住するのであって、仏教儀礼に不可欠な象徴的役割のみを演じ、その僧院生活を通して村人の生活を外から学ぶ立場にある。すなわち、彼らはその年齢、経験の浅さから形式的な儀礼の司式者としての役割のみを望まれる存在で、村内の精神的指導者としてみられること

+++++

はない。

寺院に止住する僧侶たちは全員が中等教育を受けぬまま得度しており、ほとんどの者が隣市タープラにある寺院で僧侶のための俗人教育（成人教育課程）を受けている。タイの学制は1978年以来、かつての七・五制から六・三・三制になっているが、農村部では初等教育四年を卒業後すぐに家事（農耕）の手伝いをする少年が多い。23歳の若き僧侶の場合も四年を修了後15歳まで水牛の世話をするなどして家事を助けている。その後はコンケン市内で建設日雇い労働者として1日450円から500円の収入を得ていたが、21歳になって母のすすめに従い、僧侶として得度した。彼は出家してすぐ上記の成人教育課程の第三学年に入り、自らの寺院から（夜間）通学する。この課程の第三学年は初等教育の五～六年にあたる。そして2年目、彼は中等教育一～三年にあたる同課程の第四学年を9月に修了した。第四学年を終えて還俗する者は多い。ある見習僧（17歳）も同学年を終えた後、コンケン市内のマッサージバーラーにウェイターとして就職した。長期出家を望む者はない。

彼らは文字通り儀礼を司る演技者でしかない。実質的に彼らが滞りなくその役割を行えるよう日常的に細いアドバイスをするのは村内の古老たちである。説教の題材、説経・儀礼の手配などはこの故人の篤信者によってアレンジされる。彼らは自ら出家経験をもち、非仏教的な土着の宗教儀礼にも精通した人物である。そして自他ともに仏教を推進し人々から尊敬される宗教的リーダーとして仏教儀礼を僧侶たちの背後から支える存在である。

村の日常生活では様々な儀礼が行われる。僧侶によって司式される仏教儀礼のほか、乾季には家屋の新築儀礼が集中する。さらに厄除けのための除穢・増福儀礼はその都度ひんばんに行われるが、司式者は上記のような古老たちである。彼らは妊娠・誕生から死に至

るまでの人生儀礼のほとんどに関わる。中部タイの農村部では結婚式にも僧侶が招かれるが、DD村では僧侶に関わる人生儀礼は得度式と葬式のみである。俗人サイドの儀礼の担い手として熱心な仏教徒でもある古老たちはその役割によってモータム（悪霊払いをする祈禱師）、モースー（「魂」の強化儀礼を行う祈禱師、モークワン、ブラムともよばれる）などの名称をもつ。彼らは俗人の儀礼のスペシャリストであるがゆえにモー（師の意）であり、在家戒の遵守に熱心な姿勢をもつ。

彼らは同じ俗人でありながら他の一般の人々を宗教的にリードしている。俗界にあって日常的に人々と接し、人々の不安を取り除く知識にたけた彼らは俗界の僧侶のごとく信頼され尊敬されている。彼らの存在や役割はタイの農村部においては決して特殊なものではない。むしろどの地方にもみられる仏教と土着信仰の媒介者であり、一般の人々の中であって望ましい在家仏教徒のモデルでさえある。DD村の全世帯主（184戸）があげる村内の重要人物をランク付けすると、上位10名のうち7名までが俗人の宗教的スペシャリストであり、僧侶は入っていない。7名のうち悪霊払いに関わるモータムは5名と多い。他の2名はモースーと仏教儀礼の際に俗人側の説経をリードする者（phu nam swat）である。モータムの中には、厄除けの護符を作るほかに漢方医（moya）としての知識をもつ者が含まれており、理想的な僧侶に期待される役割の一部を代替しているとみることもできよう。

人間の体内には「魂」が宿っており、病や不幸があったときにはこれを強化しなければならないという考えや、森（pa）に象徴される自然界には恐ろしい悪霊が住み、自らの生活世界をたえず脅やかしており気紛れに病をひきおこす根源とする「精霊」信仰には安穏を願う村人の秩序観が読みとれる。東北タイ

に広く流布する「村の守護霊」(phi pu ta) 信仰には人々の生活世界としての村落が悪霊の災禍から保護される形で成立しているという論理がある。彼らの生活を支える水田には、「村の守護霊」の傘下にある「水田の守護霊」がさらに想定されて加護が乞われる。数々の守護霊を正しく祀ることは、その怒りをひきおこして災禍がおきないようにすることである。多くの村はそのような努力を経ている。

DD 村も例外ではない。開村以来祀られてきた守護霊とその儀礼の記憶は古老にも新しい。だが、たび重なる大洪水や疫病は「村の守護霊」への信頼を裏切る。悪霊の仕業としてその災禍に悩まされこれを克服しようとした人々は、悪霊を追放する術を学び「村の守護霊」を一掃した。そして代りに仏教的なクン・プラタム信仰が導入された。DD 村のこの「宗教改革」のヒーローがモータムである。

「精霊」としての守護霊を祀らなくなって約 35 年になるが、このことは善き「精霊」を認めぬ村人の社会意識を生み、より敬虔な仏教徒を自覚させる契機となっている。守護力の源泉としての仏教を DD 村にもたらしたモータムは、そのような歴史的背景からも制度化されないもう一つの僧侶的存在として村人よりの高い尊敬を得ているのである。僧侶は 227 戒を、モータムは 5 戒を遵守する。それぞれの持戒の態度において、本来の僧侶はブンを実体化し、モータムは守護力を現実化することで民衆の仏教を構成しているといえよう。

4 ブンの社会的展開

東北タイ出身者はタイのどの地方よりも東北部の人間が助け合いの精神に富んでいると自負する。それは彼らの誇りであるが、DD 村にも相互扶助の生活倫理が強くみられる。一般に「近親」(sum) 集団内では「共働・共食」(het nam kan kin nam kan) が強調され、他者との場合でも運命共同体的に協調し合う

態度は望ましいとされる。また、年長者(phu thao) は年少者(luk lan) の面倒をよくみるべきであるといわれるように、年長者は若き後継者をよく保護・援助し、逆に高齢者に対しては後継者たちが世話をして死後の供養も行おうよう期待される保護⇄奉仕の相互関係がみられる。同じ親族の者どうしが仲違いし口論しあうならば、遺族が結束して供養することを望む祖霊(phi sia) の怒りをかい、病という制裁が加えられると信じられている。互いに協調し連帯することの重要性は様々な形で人々の常識に影響を及ぼしている。

ある古老は、協調して助け合うことは互いに耐え忍ぶことであるという。疲れて口もききたくない時に誰かに出会えばひと言でも相手を気使う言葉をかけ、寝ているところへ人が訪ねてきても、暖かく迎え微笑んで送り出す自己抑制の態度が必要である。このような「忍辱」(khanti) は善行であり、戒律を受けそれに耐えることと同義であって、持戒することの清浄性は心安らかに耐えることにあると解釈される。それはある老女もいうように、(戒律が) 苦しくて耐えるのが辛いほど得るブンも大きいとする持戒によるタン・ブンの民衆的論理と密接に関わっている。

ブンは決して個人的なものに止らない社会的側面をもつ。それは個人のもとに蓄積されるとともに他者と分有される。また、社会的に分有されるべきものである。出家することは当人のみならず、親の後生のためにもブンが与えられるとされる。さらにブンは亡き近親に僧侶を仲介として転送される。故人供養のためのタン・ブン儀礼(bun chaek khao) は、主催者である遺族が多額の金を投じて村人に食事をふるまう仏教儀礼であるが、主催者はもちろん、準備に協力した者、食事を食べに集まった者、ただ立ち寄った者さえもおのおのに応じたブンが得られるという。

元来、僧侶が介在しないタン・ブンはあり

えない。しかし、祝祭的な仏教儀礼の場で社会的結果としてのタン・ブン^①は親族内、他者との相互扶助、連帯行動に参与することを意味し、他者に対してどのような形であれ多少なりとも自己を尽すことはブン^②の獲得につながるのである。タン・ブンは個人の後生を焦点として、故人、「この世」の他者に影響を与える行為である。ブンを得る行為とこれを他者と分有することは相互に関連し合う。そして主催者が限られる供養儀礼や得度式は、ブンを得、これを施す主催者および支援する親族の経済力や社会的勢力を誇示する格好の機会ともなっている。

近年の村落社会への貨幣経済の浸透は、年毎に仏教儀礼を盛んにし豪華さを増す一方で、相互扶助の精神が希薄になり住みづらくなったという人々の声を生んでいる。徐々に村内に広がる経済格差はブンをめぐる宗教意識にも影響を及ぼしつつある。儀礼は全村豪者に飲び楽しむべきものだという富める者の善行の論理では、ブンはしばしば利益に、「悪

行」は資本に睨えられる。儀礼時に村人にふるまう牛やニワトリを大量に屠殺することは「悪行」である。しかし、それは他者との共同生活において歓楽と共食を通じた連帯感をもたせる善行のためには必要な資本であるという。これは戒律を遵守する個人的な仏教帰依の形とは対極をなす公共的なブンについての考え方、他者とのあり方を示すものである。

経済力がブンの価値を社会的に左右するならば、タン・ブンできないとみられる人々を生むことになる。同時に一方で数少ないが信仰は心の中の問題だとする人々もではじめる。供養儀礼を行うに足る金銭的余裕をもたぬ人々の故人の遺骨は、寺院の境内に新しく設けられ始めた墓にも入れられず粗末な仮小屋の中に置かれたままである。当人のより良き来世が、金銭の多寡で左右されはじめるような時代のなかでDD村の仏教徒たちは自らの仏教を新たにみつめはじめている。